

1971年 アラスカ合宿

松 本 繁 文

1971. アラスカ合宿

我々は6月9日23時15分白夜のアンカレッジに降りた。まだ新しいエアポートビルのなかを14個のダンボールをかかえマゴマゴ動きまわったが結局夜遅いため動きがとれず、まずはステーションビーク。ビルの外へ出て見ると外気が冷たく快よい、遠くには雪をかぶった山、近くには湖といったアラスカの風景である。

朝、エアポートリムジンで14個のダンボールをY.M.C.A.のフロントに積み揚げ、室をとりベッドに横になりそのままウトウト……………目が覚めるともう昼。急いで渉外面を片付けるべく、ねむたそうな顔を揃えてまずは日本領事館、ここでは一様の計画を説明したあと天候について詳しく聞く、それによると今入山している日本隊がベース建設で終り引き揚げるとかで「夏」が遅れているとの事であった。この後ダウントOWNに向い朝食兼用の昼食をとりに出かける。町はまだサマーシーズンに入っていないらしく観光客の人影もなく、道が雨に濡れ光っているためかいっそうひっそりと感じられた。こんな町を5人ドヤドヤと歩きまわり昼食のサンドウィッチ、スープ、コーヒー計3ドルを食い、以前栗林一路氏がお世話になったという山本教授のおられるメソジスト大学に向った。ここでは偶然に宮本氏の岳友、通称ネッド氏が今アンカレッジにすることがわかり、さっそく山本教授に家を教わり、アラスカの山に詳しい青年のもとに向うことになった。このネッド氏への訪問によりアラスカ山岳会との接触、また遭難対策に関

しての手續と全くスムーズに渉外活動が運び、明日よりは、装備・食糧購入、

翌日我々は購入装備、食糧の整理また滞在費をより安く揚げるため市内のキャンプ地に移り我々の足としてレンタカーをフルに使用し予定通り購入を済ませ、町でやるべき事を凡て終え6月15日アンカレッジを離れバクソンに向う、朝8時のバスに乗り込み途中チュガチ山脈、スタヌスカ氷河など見ながら3時頃バクソンに到着、バクソンはロッジー軒と草原の飛行場とガソリンスタンド一軒という小さな町、我々は飛行場の端にキャンプしその日、ブッシュパイロットのドン・シェルドンに連絡をとり明日を待つばかりとなった。

6月16日、天候晴、朝10時頃セスナ機で陽気な大男のシェルドンが現われ、いよいよ山に向ってGO、

先発のフライトとして、中野氏、宮本氏、それに僕の3名と前日分けた荷でヘイズ山群に向った。機内は荷のダンボールでいっぱい、身動きできない状態、ダンボールのすき間から外を見るといった具合。

ブーン……。もう着陸予定地のトライデント氷河上空である。シェルドンの「ディンジャラス、」に氷河を見るとクレバスだらけ、とても着陸できそうにない。ウーム 困った、地図をひろげ別の所をさがす、とにかくヘイズ山に近い所ではないとダメである。セスナ機は旋回して着陸地を求めた。ブーン……

我々はヘイズ山南東のスーシナ氷河源頭の傾

斜もさほどない所を指示した。セスナ機は風にフワフワしながら指示した所を旋回し高度を落とし偵察の態勢に入った。シェルダンの合図で窓を開けバクソんで集めたブッシュを、ものすごい風が吹き込む中を投げ落とし、いよいよ着陸態勢に入る。僕には雪の白さで雪面までどれ程距離があるのか必死に見てもわからない。セスナ機のソリが散らす雪片ではじめて雪面に達したことがわかったがこの瞬間、セスナ機が左に傾き、グシャー…グシャー…気がつくとは僕は逆さまになってダンボールの下になっている。ガソリンの臭いがプンプンしている。外へ出ようと試みたがなかなか体が自由にならない、逆さまにひっくりかえった機内には僕とダンボールだけのようだ。もがいてみるが体が自由にならない「あー安全ベルトをしたままだ！」逆さまの状態ではベルトをはずしダンボールを蹴飛ばすように、割れた窓から雪の上に這い出る。すぐにダンボールを引きずり出し沈黙のままテントを張り、ひととおりの片付けホーッとセスナ機の残骸が目に入った時、全く知らない広い氷河上で今孤立していることを思い知らされ不安がジワジワと感じられた。ひっくりかえってから何時間過ぎたろうか12時頃、頭がズキズキしてコブがあるのを発見した。シェルダンは救助用にランディングエリアを作っている。我々は、テントの中で寛ぎシェルダンをも呼び込んで茶を沸かしマイペースをとりもどそうといろいろしてみたが、シェルダンからは、着陸失敗の原因の説明ばかりが返ってくる。彼は、じっとしていられなく、またランディングエリアを作りテントを出た。テントの外は静かにそそり立つヘイズ山と青空とセスナ機の残骸の樹の小さなブルーのテントと一面の銀世界、全く静かだ。夕方頃になっても暗くならない白夜が何か心強い！

0時頃「ブーン……」という飛行機音に何か

ら解き放たれたようにテントの外に飛び出すと薄暗くなったテント場の横にアメリカ空軍のヘリコプターが舞い降りて来ているではないか。シェルダンは、はやくも自分の荷物をまとめヘリコプターにせかせと運んでいる。ヘリコプターの大きな音と風が吹きまくる中で大きな音でどなるように、とにかく安沢氏、苗村氏と他の荷物を運ぶよう言い、また我々の食糧が4日程しかないことを言いつづけ、シェルダンを空軍に救助させ、もとの静けさにもどった。シェルダンが去ったあと、ますます孤立感が強まる。テントに入りゴソゴソとシュラフにもぐり込み何を考えるとはなしに眠ってしまった。

6月17日、朝の間晴れ間があったが昼より雪とガス。今日はとうとうシェルダンは飛んでこなかった。

6月18日、朝・ガスと雪、風はあまり強くない、時々晴れ間よりヘイズ山が見える。PM.6:00より、雲もなくなり天候もよくなる。なぜ飛んで来ないのか。心配……。ガソリンは2リットル程。山の天気が1週間以上悪ければ僕らは没！無線用に「SOS」の英文も作った。「Any station SOS・SOS this is Mt Hayes South East 5miles Susitna GI This is Japanese Climbing party We require Food & Water」無線からはなんの返答もない。あの時のショックでつぶれているのかな？……。

6月19日、上空は暗、遠くの山はガスがかかっている。風は強い。ガソリン節約のため今日も太陽による雪解かし作業にテントから出る。昼頃より雨。はるか上空にジェット機音がする、無線で呼び出したが返答なし、夜、ガソリンの量をシビヤーに計量する。その結果250ccで3日間を過すことにする。これよりあと16日間もつことをはじき出し、脱出に6日間をとり、彼ら待つ最終

日を25日ときめる。

6月20日、朝のうち見えていた山々もガスにかくれ雨が降り出す。この天気じゃシェルダンは来ないだろう。まわりでは、しきりになだれの音がしている。P.M.6:00頃より天候はしだいによりなりカラッと晴れる。しかし、セスナ機の音はしない、今日も来なかった。明日天気がよければ近くのピークに登り脱出時の、いや今回の山行きの偵察に出かけよう。今日もついに安沢氏、苗村氏は来なかった。たばこもそろそろ切れる。

6月21日、0時30分頃、セスナ機の音に起きテントの外に出て見る、色は黄、テントの上空を旋回しているが誰が乗っているのか確認できない。窓からは手を振っているが合図らしいものはなかった。飛行機は2回旋回してあいそなく飛び去った。昼より近くのピークに向うが天候が悪くなりだしたため引き返す。

6月22日、A.M.6:00セスナ機の音！ 今度は旋回もしないで飛び去った。苗村氏、安沢氏であってほしかったが、全くの確証がない！ 昨日のセスナ機もアメリカ隊のだろう……。・

天候は快晴なのに、なぜ来ない。今日でもう6日目だ！ たばこも1日一本。

6月23日、昼頃より突然食糧装備のエアードロップが始まる。小さな飛行機の窓より手を振る安沢氏が目に入った時は、うれしかった！ 我々3名は両手を大きく振って答えた。実にうれしい！ つぎからつぎへドロップされる荷を氷河上を走りまわって拾い集めた。荷はものすごい勢いで落ちてくる。雪面に埋まる、2~3の荷は落下地がわからず回収できなかったがボロボロになったダンボールをテントのまわりに積み揚げ一段落、ドロップされたたばこをとり出し3人そろって思いきり吸った。3人互い顔を見合わせ笑ってしまった。この日は計3回のエアードロップが行なわれ、そ

のたびに3人氷河上を四方八方へと走りまわった。今日は全くいそがしい日だった。

6月24日、昨日投下されたメッセージにより、苗村氏、安沢氏がブラックラビッド氷河よりスーシトナ氷河を逆登り我々のテントサイドまで来るということから彼らのサポートに向うことにし、スーシトナ氷河を下る。いよいよ行動開始だ！ 僕にとって氷河上の歩行は初めて、スケールの大きさには、感がくるうがクレバスをさけジグザグで進む。12時間程下りそろそろテント場をさがし始めた頃、同じモレーン上に彼らを発見。彼らも気がついたらしく互いに手を振りコールをかけ合った。一週間ぶりの再会だ！ 笑いが止まらない！ お互いの孤立時のエピソードに話がはずんだ。

このようなアクシデントにより一週間遅れて、また予期せぬ装備食糧のエアードロップによる破損でなにもかも欠乏状態のまま活動に入ることになった。

合宿は、一次と二次に分け、一次に予定していた無名峰。二次にベースをヘイズ山南稜取付地点に移しヘイズに向うことにし、食糧・ガソリンの節約に気をくばり一次の合宿に入った。

まず稜線上にC₁を出し、更に稜線上を延ばしC₂を設けアタックとい線でC₁への荷上が始まる。キスリングをいっぱいにしてC₁への登りだ。クレバスの状態がよくピッチはあがる。ふり返って見ると広い雪面に一筋のトレースが美しく延びている。荷上は2日間で終え、C₁に全員あがりC₂の工作に移る。稜線よりは雲の動きがよくわかり、天候も見当がつけられ動きよい。途中フィックス80mを使い7月2日C₂を設営、C₂に宮本氏、苗村氏を残し残り3名はC₁に引き返す。この後天候がつかめず7月5日食糧・ガソリンのサポート。この翌日6日天候よく、C₂の2名でアタックに向う。(

AM 11:00の交信) - II 峰の下部。(AM 12:00) - II 峰下部のルート工作にくるしんでいるらしい。PM 1:00 - II 峰を 12:55 に通過。(PM 2:00) - I 峰直下。(PM 3:00) - I 峰に 2:25 に登頂し、C₂に引き返しつつある。C₂への途中 III 峰へも PM 5:25 登頂、PM 7:25 C₂に帰幕。C₁にいる我々はトランシーバーから伝えられることに「ゴッッッッ!」の連発。明日は七夕。

7月7日、C₂撤収後、安沢氏と僕の2名でこの稜線上北東にある10300ftのピークに向う。2人でのんびりナイフエッジ、氷壁を楽しみ、3時間半程でピークに立つ、昨日アタックを終えたI・II・III峰が美しく大きい。スーシトナ氷河の状態も良くわかる。翌日C₂撤収無人のベースにもどる。ベーステントは雪に埋れている。休む間もなくテントの周りのラッセル、二次のヘイズ山登頂に備え装備、食糧の整理、一次の節約のため、いくぶん装備食糧に余裕ができた。

7月9日 晴、ベースの移動が始まる。初めのスーシトナ氷河下降時にくらべ、かなりクレバスは発達している。ズボズボはまりながらヘイズ南稜の基部に向って前進。ベース予定地の囲りは、落石とブロック崩壊の音頻り。宮本氏、安沢氏の2名を残し残り3名は一次ベースに降り明日再びボッカ。

翌10日、二次ベースへの移動の前に一次ベース南の10100ft程のピークに苗村氏と僕とで向う。宮本氏、安沢氏の2名は昨日の南稜基部より南峰めがけてルート工作。あいにく天候が崩れ一面ガス。我々はピークまでもう少しという所より引き返し、一次ベースをひきはらい二次ベースへのボッカに入る。宮本氏らは若干の装備を南稜にデポし二次ベースに引き返す。PM 4:00頃 二次ベースに全ての装備食糧が運ばれた。ヘイズはガスに隠れている。もう夏も終りかな。この後悪天が続き毎日毎日沈殿の生活で予備を食ってしまった。ベーステント下にも小さなクラ

ックが入るやら氷河の状態は悪化、一過間の沈殿生活を終え、7月18日ヘイズ山アタックを断念し徹収が始まる、相変わらず天気は悪い。雨の中ピックアップ予定地のスーシトナ氷河とブラックラビッド氷河の分水嶺に向うがクレバスの口が大きくまたヒドンになっているため一步一步命が縮まる思いでビッチがあがらない。突然先行の者がボソッ。足がブラブラ、全く神経がまいてしまう。こんな調子で7月26日ピックアップ地点に集結。その後3日間またも、飛行場はまだかまだかの初めの孤立時のイライラを再度味わい、7月29日シェルダンのペイパー機にピックアップされ土、草、木の臭いのするブラックラビッドに集結。「緑」が目にしみる。ひげもずいぶん伸びた。

飛行機による下山のためか、今までの氷と雪と岩の生活が嘘のように思えた。

(工学部4回生)

